



## だから映画はおもしろい

vol.25

## 『ゴッホ 最期の手紙』

(2017年、イギリス・ポーランド)

●ゴッホといえば『ひまわり』が有名ですが、筆者は『アルルの跳ね橋』を思い出します。子どもの頃、「こんなにきれいな絵を描く画家が、なぜ自殺したのか？」とふと思ったことがありました。

●本作は、ゴッホの死の謎に迫るミステリーには違いないのですが、「謎解き」よりアートの世界に圧倒されてしまいます。

映画製作の手法は、まず実際に俳優が演技(熱演ぞろい)→そのフィルムを見て大勢の画家がゴッホの絵のタッチで油絵を描く→それを合成してアニメーション化するという手法を取っています。まるで、ゴッホの油絵がそのまま動画(96分)になったかのようです。ふだんは、洋画観賞は「字幕」付きと決めているのですが、この作品だけは日本語吹き替え版にしてよかったです。精緻な画面を見るだけで精一杯だったからです。

●ゴッホは27歳にして初めて油絵の絵筆を執り、亡くなるまでの10年間に多くの作品を残しました。筆者が社労士の勉強を始めて8年になりますが、「これぞプロ」の仕事をしたと言えるだろうかと考えれば、ゴッホの天才ぶりがわかります。ただ、現代と違い10年間は短かすぎて、ゴッホが世に知られるようになったのは後世になってからでした。

「不遇の一生」を送ったといわれるゴッホ。この映画を観て、「狂人」「怠け者」などという単純な決めつけは、ゴッホの生き様には相応しくないと感じました。



なかなか解決できない大きな課題とは、戦前から営業していた事務所兼倉庫が手狭で老朽化していたことでした。

倉庫の雨漏り、事務所の床は剥がれたまま。倉庫は6カ所に分散しており、フォークリフトがなく積み下ろしは手作業で行うなど、労働環境も悪化していました。ようやく移転先が見つかり、2015年8月に現在の西淀川区御幣島に移転しました。

ムへの親身な対応)を実現してきました。一方で従業員の離職率は低く、働く環境改善、人材・育成フォロー、障害者雇用、地域清掃など、「社員一人ひとりが幸せになれる会社」「社会に役立つ会社」をめざして着実にとりくんできました。

社員みんなが集える、食堂と休憩室を兼ね備えたスペースに加え、更衣室も完備され、応接室以上に？豪華です。玄関横にもおしゃれな休憩スペースがあります。従業員の結婚祝賀会を「サプライズ」で開いたこともあるとか。職場の仲間が3カ月かけて準備し、本人には内緒で伴侶を招待し、懇親会に見せかけて…。その企画力・団結力・優しさに驚かされます。見て、聞いて、感動した、素晴らしい会社見学会でした。

▼子どもの頃、ケンカが起こると「ケンカはおよし、相撲はお取り」と声を掛け合ったものでした。横綱のケンカ(暴力)は引退しても消し去ることはできません。▼「昭和レトロ」という言葉がよく聞かれますが、イメージは様々。「消費税がなかった時代」というのは筆者の想いです。「平成レトロ」もいつか流行るでしょうか。

## 「日本でいちばん大切にしたい会社」見学記(下)

島田株式会社 西淀川区

編集後記